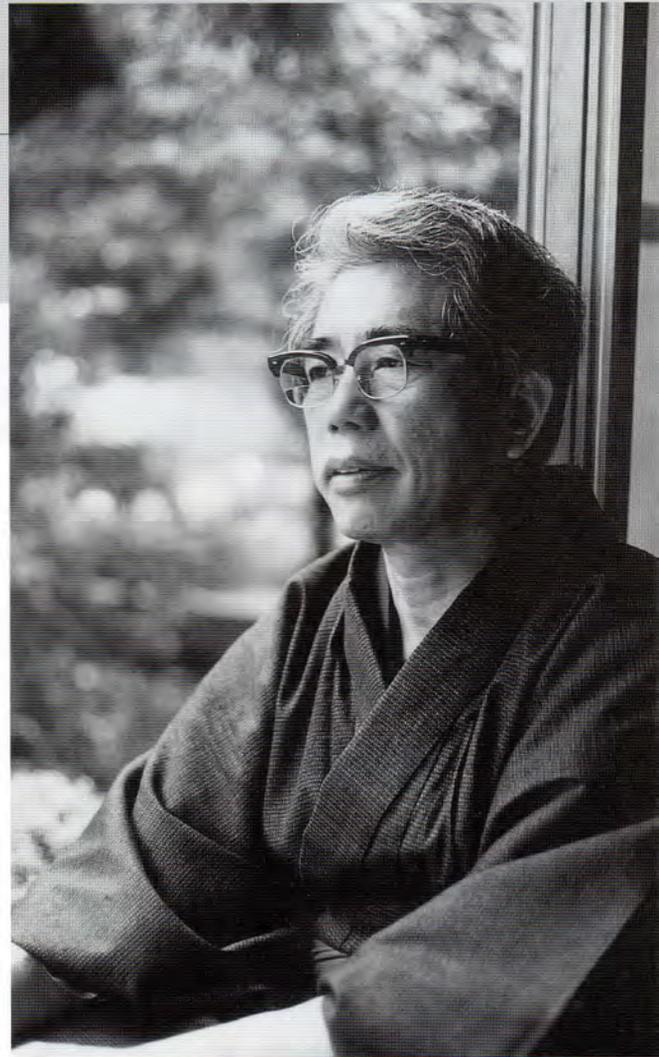


新 歌 人 群 像

上 田 三 四 二

死 生 と 再 生 力

成 瀬 有



歌 風 の 萌 芽

年代記に死ぬるほどの恋ひとつありその周辺はわづか明るし
堪へがたく夜半に嘆けばうつし世の処
女礼讃はいつの時よりか

上田三四二の第一歌集『默契』(一九五五)

〈昭和三十〇年、新月短歌社刊)の巻頭作品
「甦る神々」の中の二首。初々しい昂ぶりに

加えて、甘美な韻きが聞こえてきます。いわゆる若書きだけれど、完成度の高い作品といつてよいだろう。「默契」の後記によれば、一九五一(昭和二十六)年、二十八歳の、作歌を始めてまもない頃の初期作品です。

上田三四二の短歌が、こうした観念性あふれる作品から始まったことに驚く読者は多いに違いない。第三歌集『湧井』(一九七五)〈昭和五十〇年、角川書店)を読んで、初めて上田短歌を知った私も驚きました。「湧井」の歌風とは対極に位置する、観念性とロマン



上宮病院で働いていた当時の上田三四二（右）

チズム傾向が顕著です。

おそらく、「默契」巻頭作品に見るこの反写実性は、当時台頭してきた、いわゆる「前衛短歌」の影響がある。塚本邦雄と岡井隆の二人を中心に進められた伝統否定的な反写実の短歌運動です。「甦る神々」一連と同年の一九五一年、「短歌研究」は八月号で「モダニズム短歌特集」と題した特集を組む。塚本邦雄の名が短歌総合誌に現れた最初でした。

青年期の上田三四二が、こうした新しい短歌の流れに敏感に反応したことは、十分に考えられます。が、しかし、この「前衛短歌」の影響からの離脱は意外に早かったようです。上田短歌に最初の転機が訪れます。

京大を卒業し、京大付属病院に入局した上

田三四二は、学位論文のため家兔かひを使つての実験中に血痰けつたんを見る。当時、すでに結婚して

長子を得ています。医局員勤務のかたわら、生活のために夜間高校にも勤めている。その二重生活がたつたつての血痰でした。そして、丹後・由良の保養所で一夏を過ごします。

この結核による療養生活の体験が、上田短歌の歌風をしいだいに写実的しやうじき属目しよくもく詠へと転じさせてゆく。次のような作品を中心とする「默契」の第二章の頃です。

病むわれはここに起伏おきふす海近き黒松原
にこもるひとつ舎や

おもかげに頭ちつつ何といふやさしさ
ぞ子のかたはらに妻坐るさま

しづかなる生いきをねがひて秋づける山々
息いきふ青谷あおやに来ぬ

これらの作品に、もはや観念性は感じられない。たとえば最後に引いた「しづかなる」の一首、「青谷」は地名だけれど、固有名詞をそのまま歌語として下句の自然描写に効果的に働かせている。山々が想うとの表現ですが、作者もまた深く「息ふ」のだと、誰もが納得するでしょう。

大学時代に斎藤茂吉や島木赤彦の短歌に親しんだことも、忘れてはならない。療養生活

とあいまって、新たな調べが兆し始める。自然を単なる美、心象の具としない、いわば魂の安息の場にするという、後に確立する歌風の萌芽ほうがです。

この歌風は、第二歌集「雉」きび（一九六七）昭和四十二年、白玉書房に継承され、深められてゆきます。歌集名の由来は、芭蕉の句「父母のしきりに恋し雉の声」。上田三四二は、青年期の医局員時代に父母を相次いで亡くしています。その父母への想いを籠めた命名でした。

転機—佐渡玄冬

一人子とひとの言ふときははにかめどその父母もすでに世になし

あたらしきよるこびのごと光さし根方

あかるし冬の林は

感情のなかゆくごとき危ふさの春泥ふ
かきところを歩む

「雉」の頃、上田三四二は住み慣れた京都を去り、東京に転じます。京都時代の一九五四（昭和二十九）年、三十一歳の時、「短歌研究」の新人評論に「異質への情熱」が入選。また一九六一（昭和三十六）年、三十八歳の時には、「斎藤茂吉論」により群像新人文賞

上田三四二

（評論部門）を受賞。本格的に短歌の評論・研究活動に入り、文学的生活を全面に押し出した時期でした。

第一首「一人子と」に見るように、早くに亡くした父母への忌歌に流れる哀感を基調として、新たな東京での生活の翳りや苦渋が、第一歌集『默契』で萌芽した写実的方法によって、しみじみと歌われています。第二首は、それらをよく示した作品といつてよいでしょう。

小学校の教師だった父勇二、母ちさとの長男として生まれた上田三四二は、第一首のように「一人子」。祖父三四郎により、父の名を合わせての命名でした。少年時代を過ごした兵庫県小野市での思い出は、一九八一（昭和五十六）年刊行の小説『深んど』に描かれています。

第三首「感情の」は、上田三四二自賛歌のうちの一。感情という、いつどのように動揺するか誰も予測できないものを、人間は誰もが内に持つ。その不可解な感情さながらの「春泥」を今、作者は踏みなずみながら歩いている。「春泥」は造語に近いのですが、感情について誰もが抱くであろう思いを、普遍化する働きを担っているといつてよいでしょう。

「昭和四十一年は、数え年四十四歳である。『雉』のあと、歌風の展開を求める気持ちがあつて、私は年が明けると早々に冬の佐渡にわたつてそこで二カ月を過ごした。」

第三歌集『湧井』の付録「たまものとしての四十代」からの引用。ここに記されているように、作歌の展開を期して、一月から二月間、国立佐渡療養所に出張し、所内の一角に住み込んで毎晩のように宿直をしながら、短歌と真正面から取り組んだ時期でした。

雪の田をつらぬきてここに道はみゆり
く角巻や散る風花や
疾風をおそれこもれば日暮れんとして
薄日さす三分ばかり

荒々しい風雪の荒ぶ雪の佐渡での生活は、この二首をはじめ、厳しい風土と対峙することによって獲得した、引き締まった調べを特色とする「佐渡玄冬」三十首を生み出した。一九六八（昭和四十三）年九月、短歌研究賞を受賞した『湧井』の巻頭を飾る力作です。

後に上田三四二は、この佐渡での生活と先の丹後・由良での療養生活を、滋味あふれる小説『夏行冬暦』（一九八四〈昭和五十九〉年、河出書房新社）で描いている。次の個所が、その間の事情をよく示しているでしょう。



小説『祝婚』で川端康成賞受賞。贈呈式でスピーチする上田

「歌集の整理に重ね、彼は島で、自分を拓くような歌を作りたいと思い、その出発となるべき歌——冬の島の流瀟の心境をうたう禊歌を、ひそかに『佐渡玄冬』と名付けたが、用意してきた手帳はまだ白いままだつた。」
三十首を成す以前に、既に題名を決めていたことが分かり、いかにこの佐渡行に作歌の転機を願っていたかを彷彿とさせます。

死との直面の果てに

しかし、この頃すでに病魔が上田三四二の



自宅で孫たちといっしょに。上田の右隣は奥様の露子夫人

体を蝕んでいた。「生涯の転機となる」(一九七八)昭和五十三三年、短歌研究文庫『上田三四二歌集』略年譜)と、後年この時を顧みる、結腸癌との診断と手術です。

死はそこに抗ひがたく立つゆゑに生きてある一日一日はいづみ
たすからぬ病と知りしひと夜経てわれ
よりも妻の十年老いたり

よく知られる『湧井』の代表作中の一首。重患を告げられ、手術を待つ間の作。死と直面しつつ残された生の時間を、かけがえのない「たまもの」として噛みしめる一首です。

歌集名『湧井』は、この「いづみ」によって

いるに違いありません。二首目、告知された本人の衝撃はいうまでもなく、家族、ことに妻にとつての衝撃は、本人にもまして激しくさまざまに辛い。悲しくも愛しい一首です。

たましひのよろこびのごと宵闇の庭に
くちなしの花暮れのころ

おぼろ夜とわれはおもひきあたたかき
うつしみ抱げばうつしみの香や

今生のこともかなしき月の夜に濃き木
犀の香が此処にして

子の手ひき入日の野路をたどるとき何
に涙ぐむころと思ふ

ちる花はかずかぎりなしことごとく光
をひきて谷にゆくかも

手術は成功。まさに絶望の果ての奇跡の生還であつたに違いない上田三四二の存命のよろこびを、右の五首は、陰翳深く歌っています。たとえば二首目「おぼろ夜と」、この第一句には初春の季節感と、なお信じがたい生存感覚が重ねられ、下句の「うつしみの香」と交感する。そのなだらかな律感覚が、淡い甘美さとともに不思議な存在感を引き出しています。言い換えれば、他の四首がよく示すように、死と直面したことによって研ぎ澄まされた感覚が、自然の持つ再生力と強く響き

合つたゆゑの調べだといつてよいでしょう。

上田短歌にとつての第一の転機、丹後・由良での療養生活は、写実的属目詠への道を展きました。そしてこの『湧井』に至つて、「生涯の転機」たる死との直面によつて、上田短歌は思想的にも歌風の上にも独特な深まりを見せ、生涯にわたるテーマとして確立します。第九回(一九七五年) 追空賞を受賞。

以後、このテーマは、作歌のみならず、「うつしみ この内なる自然」(一九七八年、平凡社・平林たい子賞受賞)などの評論、『惜身命』(一九八四年、文芸春秋・芸術選奨受賞)などの小説によつて、没年(一九八九(平成元)年)まで幅広く追求されることとなります。

みめぐみは蜜濃やかにうつしみに藍ふ
かき空ゆしたたるひかり
くるしみの身の洞いのでやすらへと神
の言葉もきこゆべくなりぬ

第一首は『照徑』、第二首は最終歌集『鎮守』の代表作。一九八四(昭和五十九)年、癌再発。二度の死の覚悟が、このような清冽で強い祈りの韻きとなつたに違いありません。二首目を歌つて二か月の後、上田三四二は永眠します。

(なるせ・ゆう「白鳥」主宰)